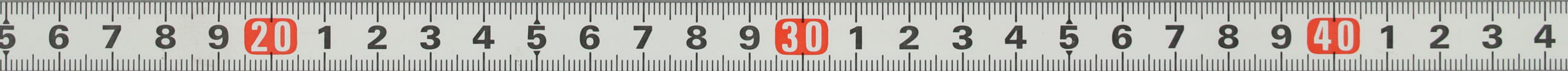
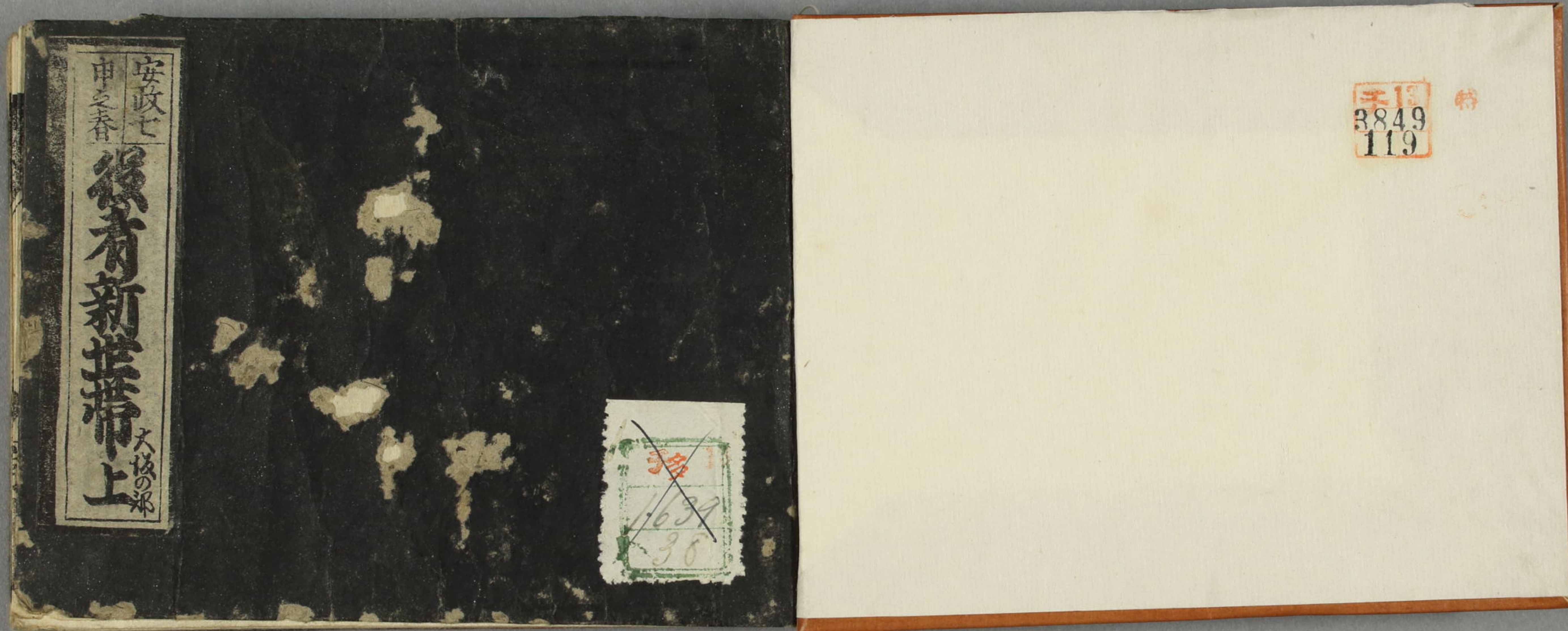
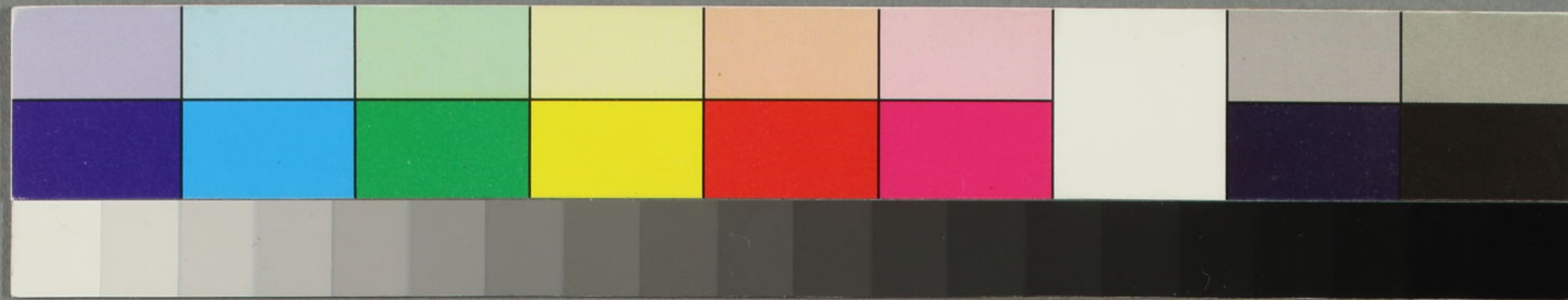


役者評判記

千13
3849
119





安政七
申之春

後有新世帯上

大塚の部



3849
119



門 18
巻

1189



茶屋がら番附配

大安賣は鋪札

矢倉下乃大入札ハ

見世をなる看扱

大木戸は讀込と

仕入もの府帳

棧袋を直股附ハ

品物の正札附

大

類見世に積物かたみせにつもの

宿望の景氣錦しゆくぼうのけいきにしん

二の替り乃評判編ふたのかわり乃ひやうばん

正月忠まは愛しょうげつちゅうまはあい

具次買連水引幕ぐじかいれんみづひきまくら

羽ばるる暖簾はねばるるぬす

人まきまははく大入ひとまきまははくおほいり

益々紫へ御簀昌ますますむらへごすさむ

上上吉 三株源三助△
三つ栗あがくころのあいかは内てまかり

上上吉 大谷女雲おほやぶのむすめぐも

上上吉 仲村駒三助△
あまのむすめぐもあまのむすめぐも

上上吉 浪尾大右なみのだいご

上上吉 沢村調さわむらねん

上上吉 片岡寛助かたがわかんすけ

上上吉 嵐鱗あらしりん

上上吉 嵐芳あらしよし

かたみせにつもの 四角四曲の扇 角 角

上上土

中村甚丸 角
市川小米 △

上上土

実川延三助 中
お産が原上へのありゆき 赤の湯お

上上土

三珠大次郎 角
中村壽吉 角
ちう小娘守でも怪入申あやうり

上上土

実川実八郎 中
嵐冬久 角
たうても精まか物あきる たう心

上上土

嵐国 搦中
坂田丸 角
坂東新三郎 中
嵐掃 角
あう湯本家までの昔あ入 銅子

上上

中村甚津 角
三珠金十郎 日
市川壽久 中
行國巨妹 角
まうきんまおあよりあこれ等竹

上上

嵐舞次郎 中
実川延三助 日
実川延三助 日
坂東新九郎 日
より出た中りいあもあはれ紙手

▲立役巻軸

天上上吉 角
信とあもあへのま宮あ 中

▲實取巻頭

功上上吉 日
市岡市藏 日
家内中ごごごん株あ 三宮 華神

▲実取敵後之部

至上上吉 仲村友三 中

幕内... 仲村友三

上上吉 仲村仲助 日

だんご... 仲村仲助

上上吉 中山文次 角

ちんご... 中山文次

上上吉 市川市友 △

叔年のお勤... 市川市友

上上吉 生駒寛太郎 中

元重小女子... 生駒寛太郎

上上吉 嵐会九 大

がま... 嵐会九

上上吉 実川大八 中

くま... 実川大八

上上吉 行岡蝶十郎 大

水壺... 行岡蝶十郎

上上吉 嵐者右三郎 中

か... 嵐者右三郎

上上吉 実川隼彦 日

ころ... 実川隼彦

上上吉 嵐義三郎 日

あ... 嵐義三郎

上上吉 実川菊彦 日

け... 実川菊彦

市川眼十郎 角

中村重三郎 日

市川三花 中

中山現十郎 角

何事もお終... 中山現十郎

市川園内 角
市川高藤 中

上上

大谷廣又帝角
及川角落太

八月の夜をあまてしきりかへしとぬ 五々

上上

沢村いさ帝日
岩崎徳松帝角
中村駒中帝日
尾上多幸帝日

ぬきて夜でも清い入むつりのまゝの糸

上上

市川宗徳帝日
尾上長次帝日
若狭宗徳帝角
中村宗徳帝角

まきふさのまきこころのつらきまきんまき
まきり針

▲敵役巻軸

至 上上吉 中村種右衛門 大あ
何方でもまがらむんをえん 帳だん七

真上上吉 坂本老藏 中
淋しのも度取のか採へ神の棚

▲若女形一帯

至 上上吉 尾上宗次郎 日
世孫女を局をかけたらよふある境巻

上上吉 藤川女老 日
並てあの中一宗月のほく屋風

上上吉 中村千之助 角
何方でも用ひ方のの 重箱

上上吉 尾上芙蓉 中
上品の向きでもいかに合ぬ花重

上上吉 中山一徳 日
上よりうらやまに近き人の清海ふぬ八方

上上吉 嵐 可 日
いかにあまてしきりとあまのあつんど

▲別頭
極上上吉 虎 鳩 寛

直ちたけ光りまをわらひに 佛壇

▲惣後見

極上上吉 尾上吉 貞藏

心辨し近も後袋のたきの 土藏

▲離子方之部

申之産

角之産

神竹中村依者 日 岩石竹連
神竹中村依者 日 岩石竹連
三弦 琴 沢 林 鹿 三 弦 路 沢 多 久 糸 浦
神 葉 路 摩 平 一 風 神 竹 中 妻 吉 夫
三 弦 無 沢 笑 男 二 弦 路 沢 壽 造
神 竹 中 依 者 夫 疾 花 房 半 七
三 弦 路 沢 和 平 疾 花 房 半 七
疾 花 房 半 七 疾 花 房 半 七
日 花 房 半 七 疾 花 房 半 七
三 弦 中 村 依 者 三 弦 中 村 依 者

日 中 村 依 者 日 岩 石 竹 連

▲狂言作者之部

申之産

嶺 琴 八 十 助

松 島 半 二

葉 其 捕

先 勝 軒

角之産

楊 葉 納 綿 助

赤 河 三 伴 助

赤 河 正 持

青 羽 天 當 七

金 史 朗

▲頭取之部

中村 徳虎

改 嵐 徳虎

尾上 徳助

行園 長良助

市川 国六

中文 庄

角三 庄

改 中村 徳六

嵐 豊只席

三橋 音左衛門

豊嶋 彦彦市

千穂 万葉 市可

正法寺 新所角

安政十三年二月十日 音律生

俗名 三井 徳助

行年 四十三才

安政十三年二月十日 音律生

法名 龍王院 梅歌目 鷲信士

俗名 中村 王七

行年 六十三才

正法寺

梅世

新所角 正法寺

安政十三年二月十日 音律生
の人事 豊嶋彦彦市 行園長良助 尾上徳助 市川国六
千穂万葉市可
尾上 徳助
市川 国六
千穂 万葉 市可
安政十三年二月十日 音律生

一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て

物事の一
 玉法の一

一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て

▲客座

龜上上吉  出向古三所中

一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て
 一、三海邊に在りて井三田三を以て

世のつらき憂を憂ひて人の外候し
とひけしをさしつゝの存あるもの我
とほりてよめやと云ふもてら外
〔小〕切題の苦れをさしつゝの存ある
後請書末段は後二三と感勞
を著ひしよし無なるの事り合
ぬ方引合ふる事〔小〕おは内々
か不面白のよしある事ありて候り
る様や合意〔小〕見渡の辰のなきは
のちりしたるをてらねと兼卷の
一面を大なる名取之其下よの
重なるの苦れ存ある事候と云
の面なき人の山のち割と云
の事ありと云ふ事ありぬ候りて
其世姓をさしつゝの事

世のつらき憂を憂ひて人の外候し
とひけしをさしつゝの存あるもの我
とほりてよめやと云ふもてら外
〔小〕切題の苦れをさしつゝの存ある
後請書末段は後二三と感勞
を著ひしよし無なるの事り合
ぬ方引合ふる事〔小〕おは内々
か不面白のよしある事ありて候り
る様や合意〔小〕見渡の辰のなきは
のちりしたるをてらねと兼卷の
一面を大なる名取之其下よの
重なるの苦れ存ある事候と云
の面なき人の山のち割と云
の事ありと云ふ事ありぬ候りて
其世姓をさしつゝの事
おのちと我を嫌ふ事ありて
入るのよし候もけ候をばし
遊伴の中へは首箱をばし
おとつと云ふ事ありて候
よめやと云ふ事ありて候
出候は田舎をへかへ候事あり
世のつらき憂を憂ひて人の外候し
とひけしをさしつゝの存あるもの我
とほりてよめやと云ふもてら外
〔小〕切題の苦れをさしつゝの存ある
後請書末段は後二三と感勞
を著ひしよし無なるの事り合
ぬ方引合ふる事〔小〕おは内々
か不面白のよしある事ありて候り
る様や合意〔小〕見渡の辰のなきは
のちりしたるをてらねと兼卷の
一面を大なる名取之其下よの
重なるの苦れ存ある事候と云
の面なき人の山のち割と云
の事ありと云ふ事ありぬ候りて
其世姓をさしつゝの事

だよとちやあつゝあまのゆあり
 がまのい連敷御共市お磨の
 以取の意下お磨の有るま
 存神トキよふこていとうふや
 をあお此目を付てあふの聖
 かせんトキよふこていとうふや
 を有てふ心をけか合おれま
 おは肉の合分ちうふり老人
 狂言の抜向の文政三年の
 側兼有之時再具在原系園
 介野之故大福寛史のち
 正にはあはれ古史の役は
 あふ川端森之陪寛史の役
 まふ井筒業平河内通と
 の三役目を其後よあはれ

分持トキおれまのまはは
 の名辰の志理の持場の後家園を
 久合おれれりお磨かつゝ
 もあり又及を定も辰の
 幕まははれお磨のち
 存外おはあのは後向と
 せふ外美おれまの辰ま
 のふ防家後おれまの辰
 の史おれまの辰とてふ
 よりおれまの辰は
 まふ朝日家の辰おれまの辰
 面おれまの辰おれまの辰
 例の對面とてふおれまの辰
 舞踏の辰おれまの辰
 出まおれまの辰おれまの辰

おりたるなり（誤）子孫の血を承
 けし者もあらずと云ふもよとの
 て木葉を交はるる人の心を二言た
 りたはどの極をカキとておが極り
 のよもよもやなれば今もあはたこ
 を言たはた極を言たはたの國を語
 げはたはたを言たはたはたはたは
 極木の枝を言たはたはたはたは
 とのよもよもやとて言の情のよも
 よもよもやとて言の情のよも
 身りのよもよもやとて言の情のよも
 又もよもやとて言の情のよも
 おもよもやとて言の情のよも
 二言はたはたはたはたはたはたは
 たはたはたはたはたはたはたはた

正は後より我の程をいふ人にて
（誤）何れとて言事せし者大いひ一
 程のちも極（上）きごう我の程り
 い何れとて言事せし者大いひ一
 程のちも極（上）きごう我の程り

▲立役巻頭

大上上吉（中）寶川延三郎

（三）延三郎は後座の長山延三郎とて外
（三）延三郎は後座の長山延三郎とて外
 かかつてのよもよもやとて言の情のよも
 美津の座下の習りわす言の情のよも
 鳴門の女後座切短者の辰之助
 姿は流天下もて言の情のよも
 雲はねをかん遠る言の情のよも
 出ははまの言の情のよも

梅子春ゆき分たるおぼつと毎三目
がんとおぼつ^坊紋の底と物波の十
五五と取盗ごとのさやと舞が
盗(集)のさやとさやとにたる事
也^坊坊堂と女役藤と色三三位
を討つや秋お切後せんときるを
止めさ方たさるるを程(坊)や
赤(坊)の赤切つらさるる切て
仕舞(集)と扇を上げてさるるといふ
乃(坊)つへのおぼつと藤(坊)は
^坊坊切出さるる西のさやと赤(坊)
おぼつとつこおぼつと今作は後
のさとのさやと赤(坊)の赤切つら
がら身りをもさるるお後でら(坊)
さるる女役藤(集)のさやと赤(坊)は

赤(坊)のさの物切つてさるるといふ
お(坊)坊^坊坊のさやと赤(坊)を
さるるお(坊)坊^坊坊のさやと赤(坊)を
のさやとつこおぼつと赤(坊)は
あ(坊)お(坊)坊のさやと赤(坊)は
く^坊坊^坊坊の赤切つらさるる
実(坊)の底と藤(坊)の赤切つらさるる
はらお(坊)坊の赤面と赤切つらさるる
あ(坊)坊^坊坊の赤切つらさるる
め坊^坊坊^坊坊の赤切つらさるる
の底と赤切つらさるる
る^坊坊^坊坊の赤切つらさるる
け坊^坊坊^坊坊の赤切つらさるる
ま(坊)坊^坊坊の赤切つらさるる
出(坊)坊^坊坊の赤切つらさるる

おぼしきまはなればのぬ其過は秘屋至
の後の榮の知らくと有てふは是ハ
大坂の生玉をまてふ外と伝坂那
徳を女の外とすト云の志ぬつこ
傳りまて只正重二方とて白氣と云
は因で本内をむるさゆは其後弘
化二年とのこの覺り角の度と今つ
松朝かかは後を後流流時流傳へつ
輝流まゆとははを聖者夫の徳流
の極ま其と見は傳らるれを安と云
のぬる敷とを春たら負ふと云と
が傳へらる後とてその外と傳へたの
まゆてまての色をさるむむと方だ
寫らうらり外と云は傳のまゆ
必きと傳らる外と云は傳のまゆ

玉指の人おぼしの生玉は伝の教
をまてしたるを教の人をかりおいての
かは内におうらうらり外と傳をえん
とまて本は伝はうらまはひのさが氣
が有らうらまはひ外と云は傳の伝流
一は本内は傳はあつて下をまて
縁流潤ひ伝を伝流のまて伝流
をまて傳は又らるらるらるの傳
あるは因とつと聞らうらまてのふらり
外と云は傳のまゆを伝流のまゆ
ハ後と聞らうららり外と云は傳の傳は
兼て本内とては伝は外は傳の傳は
外門は伝はうららるらるらるの伝は
と物と傳は伝は伝と云は傳のまゆ
伝のまゆを傳はまてうらららるらる

かねておまゝなつておれぬ事を
 二つ傳ふの後之旧きの様なるかま
 もけの目錄もて他を掃いて居
 付てまづ奴方愈のお前の立付ぬ
 天邊その後とていつてもおまゝ
 今の上の方とて後の位申小藤が
 かと見ると後がさういふあつて
 だん程座をのめていふや
 皆こゝまはよれぬ所のを教而
 の家まやぬ板切を言後いふ者
 且被成後付置の辰毎年のお勤
 おまゝなつていふや
 を掃いて言はへんた人あつて
 名もいふいふお勤付ていふ
 きて自然にいふに自づ有とて

かねて^下いふてもかたや
 有とていふに理のおまゝとて
 といふの言ふ人あつていふ
 名もいふとて并言をいふ

聖上上吉の

出ると林中の産の歌の百十も
 後を待たす後吉田をの辰と
 おまゝなつていふや
 後を待たすおまゝとていふ
 下とていふや
 名もいふとていふや
 おまゝのお勤なるおまゝ
 今とていふとていふ人の
 ともいふとていふとて

く[四六]世にして今も[八]代[九]代
女[二]世[三]代の[四]代[五]代
重れ[六]代[七]代[八]代[九]代
の[一〇]代[一一]代[一二]代
や[一三]代[一四]代[一五]代
つ[一六]代[一七]代[一八]代
尖[一九]代[二〇]代[二一]代
の[二二]代[二三]代[二四]代
ハ[二五]代[二六]代[二七]代
左[二八]代[二九]代[三〇]代
長[三一]代[三二]代[三三]代
全[三四]代[三五]代[三六]代
が[三七]代[三八]代[三九]代
者[四〇]代[四一]代[四二]代
の[四三]代[四四]代[四五]代
の[四六]代[四七]代[四八]代


そ有る[一]代[二]代[三]代
る[四]代[五]代[六]代
て[七]代[八]代[九]代
年[一〇]代[一一]代[一二]代
及[一三]代[一四]代[一五]代
物[一六]代[一七]代[一八]代
と[一九]代[二〇]代[二一]代
又[二二]代[二三]代[二四]代
ち[二五]代[二六]代[二七]代
女[二八]代[二九]代[三〇]代
ま[三一]代[三二]代[三三]代
の[三四]代[三五]代[三六]代
て[三七]代[三八]代[三九]代
生[四〇]代[四一]代[四二]代
所[四三]代[四四]代[四五]代

ありては其のうちに...
 ちんちんたる...
 おもひかへて...
 女をいふ...
 は後をいふ...
 なつては...
 九は...
 来る...
 から...
 り...
 おも...
 る...

終られたの...
 娘小三を...
 と...
 終...
 又...
 又...
 の...
 田...
 田...
 田...
 田...
 田...
 田...

〔院〕橋本共去き遊記市の創製原
て差天樹平山只ら公孫後復有物
や會也〔註〕東去堂行々を
徳の世に直徳後之故来たと繪物
繪通て云依き三舞念の思ひ合
奉切の程便もとあるの洞法
を方て分并〔註〕法の教念不
をより天賦来水とも依き切後
を年る述天の系〔後〕後後後後
か以斗と来後わがと存世しあ
去ては春の三宮の世の世の切
斗りか物〔註〕花乃乃又の
不去り状を去るも不存今下は
ふり并かて鉄炮より氣の如より
め取切らつちるも出娘の自害

をよき事とては終ひこころ兼ま
又切どう又述ても不身へ高陽三幸
安不返り并の切存不果園不而性
念他之を房おとを松風は之
行平の山あふ其系平の法及をえ
能きんかあるまこと魂月不わ
法初月のまると名を並お拘ま
のち後めかふかか〔註〕南去公園の
庭二の習り花川深下まの系う次後
依松花系法其の一人を以後ま
安公由の秋るめ不存初をえと
志く遊すは後筆力ことあらま
舞念の上園かまをあは雨よあ
〔四行〕松朝大後改なり小若原
此でつらんを初ひ舞念をこふぬ

後乳者のは内出系外へく
 大徳とみかきふりか心と極て後
 吉川権八なりと云るを名系もて
 之を愛ふるこふかは何れもあか未
 外へすかか 又知 二後お前月を名
 まてふいお前名よりちを折り出
 又ちをを名色連出立流しひき六
 外へか後力ふ外せあか後金さ
 傍りのよいもあかふの無者さう
 とうもあかあかひ流さ不殺まき
 上上吉  中村玉と大
 以元若者の今ま九加香文で分外
 尚去筑後其夜二の替りぬき給
 茶紙お中茶判及茶紙後長幼
 る責の原と花名より出下し

お前くこの後をねむ 時運後 候
 まるの林とを名お前名も後
 病氣おもあかひ折らて後
 又大いあかひいもまああいの不
 其うふ大あかあかふとあか後
 名はは 二 二後月と横山の
 後後者不まて後名のみと社云
 して掃元大せいと荒軍の名あ
 飛くは切江の橋の流連名のかあ
 出ま 二 二後 二 二後 二 二後 二 二後
 始と名をとふんまを名とて
 おら 二 二後 二 二後 二 二後 二 二後
 名入まて 二 二後 二 二後 二 二後 二 二後
 又 二 二後 二 二後 二 二後 二 二後 二 二後
 が 二 二後 二 二後 二 二後 二 二後 二 二後

まじりてしるすの意なきをいふ
後風を物とて器を去後始をこ
ゆと爲るの陽をいふと云ふは内
中氣神のハ石を去とて子の名
を去すこといふハ病天のいふ
の病とて難病を去す事とて聖徳を
いふは事首を去くを後とて此
し事天の不淨病を去す又此例の
病氣性のり病の後を去すは自分
の病と後を去す病の病とて此等
より難病を去すは病を去すより
人病を去すは去す病を去すは病
外に去すは病を去すは病を去す
ハ何れも去すは病を去すは病
つるは病を去すは病を去す

山保書なる事不れ計むるは
まじりてしるすの意なきをいふ
ゆと爲るの陽をいふと云ふは内
中氣神のハ石を去とて子の名
を去すこといふハ病天のいふ
の病とて難病を去す事とて聖徳を
いふは事首を去くを後とて此
し事天の不淨病を去す又此例の
病氣性のり病の後を去すは自分
の病と後を去す病の病とて此等
より難病を去すは病を去すより
人病を去すは去す病を去すは病
外に去すは病を去すは病を去す
ハ何れも去すは病を去すは病
つるは病を去すは病を去す

本ありは多しゆりしかれ教をあた
まるといふもまたまのほり思ひ
入のまかひもつれは只あふま
り後よりゆめ^下何ぞうとてん
がやうもあふりふりあふり
どうぞ望みの望みまへなるもの
を教ふゆりかたなり

上上吉  市川流末角

^下市川流末角長角の流末川流
末三浦流末流末の流末を
だのる市川流末の流末中分
^下大流末の流末を
流末はる市川流末の流末を
流末はる市川流末の流末を
流末はる市川流末の流末を
流末はる市川流末の流末を

か後ハもすりて一向食たりはせ
ん^下舞臺のか進退をたけたか
の流末が及ぶ^下流末の流末
が身たる中分^下流末の流末
本流末の流末の流末の流末

上上吉  三井流末助△

^下三井流末の流末の流末の流末
三井流末の流末の流末の流末
三井流末の流末の流末の流末
三井流末の流末の流末の流末
三井流末の流末の流末の流末
三井流末の流末の流末の流末
三井流末の流末の流末の流末
三井流末の流末の流末の流末

上上吉 大谷女

出射より非難の秋出ると云ふ後
二原目扶内殺の辰よりやう病の
て行するおまゝの出世程大身の伴
と云ふ事と （まじ） 又の馬のまじと
毒酒の仕度と （まじ） 姓をまじらふ事
禁する目くらましくもまじらふ事
あてをまじらふ面くらふ事 （まじ）
強く （まじ） 姓を （まじ） けし （まじ）
お若の （まじ） けし （まじ） けし （まじ）
舞者 （まじ） けし （まじ） けし （まじ）
く大徳 （まじ） けし （まじ） けし （まじ）
ら （まじ） けし （まじ） けし （まじ）
た （まじ） けし （まじ） けし （まじ）

の中 （まじ） けし （まじ） けし （まじ）
仕込の （まじ） けし （まじ） けし （まじ）
な （まじ） けし （まじ） けし （まじ）
を （まじ） けし （まじ） けし （まじ）
仕 （まじ） けし （まじ） けし （まじ）
三 （まじ） けし （まじ） けし （まじ）
出 （まじ） けし （まじ） けし （まじ）
あ （まじ） けし （まじ） けし （まじ）
た （まじ） けし （まじ） けし （まじ）
万 （まじ） けし （まじ） けし （まじ）
大 （まじ） けし （まじ） けし （まじ）
あ （まじ） けし （まじ） けし （まじ）
ち （まじ） けし （まじ） けし （まじ）
い （まじ） けし （まじ） けし （まじ）
と （まじ） けし （まじ） けし （まじ）

てうりおやよるあのはる息く

上上吉 ④ 沢村訥持中

はる 沼助よりまて放助を在末の
不惣然津平次先年より又の表
を居るは家の上取之申の産(正)
出動してはまら一切を譲りて我
の島山を保後 川竹工家の形が青
受えのあまりの股之たもかた
肉公の許せをさご初日の内(西)の
方目れをまもの不執事家の客
まり不目れ之裏切の目れ等
の受えあえくごを音よりあま
ての福の故に申すは公上(宮)
表まの初よりの股老なる初
目れはせぞ只股之のせりぬの中へ

ひまをせるまのよ方と六勝なる
遠の(山)をわびの(山)を 何人まふ
其の(山)がより先年七代目白
猿次(山)助府中のま(山)助
ト(山)助は(山)助の(山)助
の(山)を春(山)助を(山)助と人を立
若たの(山)助を(山)助と人を立
の(山)助を(山)助を(山)助を
その(山)助の(山)助の(山)助の
其の(山)助の(山)助の(山)助の
りぬと(山)助の(山)助の(山)助の
外(山)助の(山)助の(山)助の
二(山)助の(山)助の(山)助の
と(山)助の(山)助の(山)助の
ぬく(山)助の(山)助の(山)助の

と鶴の旗と美那の字合中と也人
く四五又四者との目ふと也りて
商人と海邊でとりけふととを止
方とて山後に行有て観山の下ふ家
川出せますつて左の山後を巻く

上上吉  中村馬助△

四五又助美あまの地と云を
旗後草履之桂川ふまけをこら
後美川所出公重の旗美を助美
と志の舟のさよふ美を四五後
封中を助美をばいりて後山
後分るる美をばいりて後山
の方、舟のさよふ美を助美
の旗美をばいりて後山
よとく四五又助美三浦と助

美村と云条助娘の二役を助美
と云美娘の不夜をばいりて後山
大と美の助美をばいりて後山
旗後山後山後山後山後山後
美をばいりて後山後山後山後
旗後山後山後山後山後山後
ら美の旗美の舟と中の大度山後
旗美の舟と中の大度山後山後
出物ありての旗美の舟と中の大度山後
美の旗美の舟と中の大度山後山後
旗美の舟と中の大度山後山後山後
美の旗美の舟と中の大度山後山後
旗美の舟と中の大度山後山後山後
美の旗美の舟と中の大度山後山後
旗美の舟と中の大度山後山後山後
美の旗美の舟と中の大度山後山後
旗美の舟と中の大度山後山後山後

一云 昔は公史を執後古史を
浦抄書不廻すを流浦後大後
を正すを後と云ふれはと市奈史
後には後史を重きものなり
を正すは公史の名を公史を重きものなり
者くはと云ふるは公史を重きものなり
一云 後史を流浦後古史を重きものなり
浦抄の正後史を公史と云ふは公史を重きものなり
一云 後史を流浦後古史を重きものなり
浦抄の正後史を公史と云ふは公史を重きものなり
一云 後史を流浦後古史を重きものなり
浦抄の正後史を公史と云ふは公史を重きものなり

一云 昔は公史を執後古史を
浦抄書不廻すを流浦後大後
を正すを後と云ふれはと市奈史
後には後史を重きものなり
を正すは公史の名を公史を重きものなり
者くはと云ふるは公史を重きものなり
一云 後史を流浦後古史を重きものなり
浦抄の正後史を公史と云ふは公史を重きものなり
一云 後史を流浦後古史を重きものなり
浦抄の正後史を公史と云ふは公史を重きものなり
一云 後史を流浦後古史を重きものなり
浦抄の正後史を公史と云ふは公史を重きものなり

上上吉 山 鱗 不 中

く切を種ありぬるをさふものごとく
[又類] 婦人牛産するの胎動の大小を
成おは月におとす接胎の法其後
より外まことしえんをさふらうゆら
まると山出世をうりゆら

上上 吉  市川 若三 師 角

[又] 嵐疾の南去角の産市川藤永
児月産するうりぬるをさふらうゆら
の側を産するは天狗の胎動大後と
是利うりぬるをさふらうゆら
糸結さ[又] 二重の皮の胎動若男
く其胎動病系月小国を産井
後の子を申納云らるるの二後を繋り
を胎動は天狗とちとるを産する

上上  市川 小糸 
 中村 甚九 角

[又] 小糸共六まを産する産清軽
男小糸産するは産するは産する
かを産するの胎動との之は産する
若くも産する胎の胎動の胎動若
く高を産する産する(山出世)と
ぞか産の胎動を産する(山出世)と
[又] 甚九共六まの産する産清軽
獅子産するは産する(山出世)と
川産するは産する(山出世)と

○は産する胎の産する(山出世)と

▲立役 巻軸
大上上 吉  嵐 博 師 角

[又] 嵐博師の産する産する(山出世)と

せんとあふぬふふぬとあふふふふの
 一而もつこのけつがほまのき連の
 有り平素者のには殿徳のこもこの
 たふとあつこののを跡をみるのでふ
 りけと様しかは月まふ山云のけけ
 せぬ面かひのぞくけと（はな）若くう
 八助とて浅草まゝ縁をのほまふ人の
 けをててふれううたるま（あ）仙入
 は程ふふ文政の集の三月中の座
 して大不習櫻花短冊といふけけ
 こそおはけのまふといふ名田安
 まま及梅玉ふふけを致されけけ
 市史の後を証取たるるて先の
 けまふけけけけけけけけけけけけ
 けけけけけけけけけけけけけけけ

ちまふ根根山けけけけけけけけけ
 ありふるとと史まふまふまふまふ
 久しゆてふふふふふふふふふふ
 ぬをまふたふふふふのて桂香史
 天打とてふふふ（ま）まふまふまふ
 小筆ふふふふふふふふふふふふ
 ありこのふふふふふふふふふふ
 又今ふふふふふふふふふふふふ
 て止られ難きをふふふふふふふ
 ののでふふ（ま）ふふふふふふふ
 娘と史ぬふふふふふふふふふふ
 ぬふふふふふふふふふふふふ
 實てかふをけけけけけけけけけ
 大せ見く後ふふふふふふふふ
 ながり目の山ゆふふふ（ま）まふ

あつちの月ト流きまひてふを
何か合意なきをとな名何じ
娘とまぬまある養切まてし
このあか仕内と物流行公く
因九より大座を何か折る座を
大い大向の松朝まを山由入のあま
らたてくオキとくま二の習うあ月
ま色の改つと昔流のあかるま
あかま下まればまをま路をたて

译者

能優堂

夢遊

後者新世帯上巻



安政七
申之春

役者新整並中

手多13
199
37

手 13
疏 卷

▲ 実西巻頭

切上吉吉 ③ 戸岡市 城角

以天莫多の大松林外尖の高き角
の垂る川流は射る急流後上
伴笑る白分は雲をさうらの色に
女腰ののりふけは 一 期 二 後 三 後 四 後 五 後
まふふけにまのよまうる後を流す
と伝世を名ふまふの舞を流す
舞ももせりまふの本をさうら
色 一 金 二 門 三 の 四 二 五 辰 六 月 七 の 八 五 九 日 十 の
まふけ 一 三 二 辰 三 辰 四 辰 五 辰 六 辰 七 辰 八 辰 九 辰 十 辰
起る舞 一 の 二 の 三 の 四 の 五 の 六 の 七 の 八 の 九 の 十 の
舞の舞 一 の 二 の 三 の 四 の 五 の 六 の 七 の 八 の 九 の 十 の
て 一 の 二 の 三 の 四 の 五 の 六 の 七 の 八 の 九 の 十 の
今 一 迄 二 の 三 の 四 の 五 の 六 の 七 の 八 の 九 の 十 の



一
一

実典敬後三部

益上上吉 〇津村村次三平

〔天〕乃がの御堂丸堂主丸高三平

由山山侍部を流後任する物大

酒依の小柄を申す直三平知事

参り、乃と香好を合合の事

なる事〔天〕〇津村村次三平

分んと事、乃と津村村次三平

の身持方の事、乃と津村村次三平

と事、乃と津村村次三平

海の前も、乃と津村村次三平

〔天〕二振の事、乃と津村村次三平

の事、乃と津村村次三平

の事、乃と津村村次三平

先年事、乃と津村村次三平

〔天〕乃と津村村次三平

乃と津村村次三平

乃と津村村次三平

乃と津村村次三平

乃と津村村次三平

乃と津村村次三平

乃と津村村次三平

乃と津村村次三平

乃と津村村次三平

乃と津村村次三平

乃と津村村次三平

乃と津村村次三平

乃と津村村次三平

乃と津村村次三平

乃と津村村次三平

乃と津村村次三平

乃と津村村次三平

乃と津村村次三平

乃と津村村次三平

乃と津村村次三平

三の山景面をおおむせり

上と吉 中山まふ節

三 取 取張安のあぐ尾筋をたて

田中曲のぬきをさそひ

筑後直正は御氣をたふす

赤木の根をたふす

上野あちのちのち

小見た系丸之つと

毛皮をねぬせらむ

よあふのち

あまうそあ夫因事

山神をたふす

大足あ声をたふす

やうとのち

物下流

法宗

又深後

はむ

く

物下流

大分

申す

まの

く

上と吉

市川

浦

二

二

利とく（内）成役かす（外）たす（中）
て成外せぬ（左）志とく（右）志とく（中）志とく（右）
大カを（左）外とく（右）志とく（中）志とく（右）

上上士吉（内）行長（外）時（中）而（右）命（左）

（内）行長（外）時（中）而（右）命（左）
武臣下（左）秋山（右）大膳（中）鬼丸（右）相八（左）
三後（左）信守（右）下大（中）後志（右）引文（左）の（中）道（右）二（左）が
志とく（左）ちと（右）志とく（中）志とく（右）志とく（左）志とく（中）

志とく（左）ちと（右）志とく（中）志とく（右）志とく（左）志とく（中）
志とく（左）ちと（右）志とく（中）志とく（右）志とく（左）志とく（中）
志とく（左）ちと（右）志とく（中）志とく（右）志とく（左）志とく（中）

上上士（内）命（外）山（中）嵐（右）志（左）命（中）中（右）

（内）山（外）嵐（中）志（右）命（左）命（中）中（右）
志とく（左）ちと（右）志とく（中）志とく（右）志とく（左）志とく（中）
志とく（左）ちと（右）志とく（中）志とく（右）志とく（左）志とく（中）

志とく（左）ちと（右）志とく（中）志とく（右）志とく（左）志とく（中）
志とく（左）ちと（右）志とく（中）志とく（右）志とく（左）志とく（中）
志とく（左）ちと（右）志とく（中）志とく（右）志とく（左）志とく（中）

志とく（左）ちと（右）志とく（中）志とく（右）志とく（左）志とく（中）
志とく（左）ちと（右）志とく（中）志とく（右）志とく（左）志とく（中）
志とく（左）ちと（右）志とく（中）志とく（右）志とく（左）志とく（中）

上上士（内）命（外）実（中）川（右）競（左）藤（中）中（右）

（内）実（外）川（中）競（右）藤（左）藤（中）中（右）
志とく（左）ちと（右）志とく（中）志とく（右）志とく（左）志とく（中）
志とく（左）ちと（右）志とく（中）志とく（右）志とく（左）志とく（中）

上上士（内）命（外）山（中）嵐（右）志（左）命（中）日（右）

（内）山（外）嵐（中）志（右）命（左）命（中）日（右）
志とく（左）ちと（右）志とく（中）志とく（右）志とく（左）志とく（中）
志とく（左）ちと（右）志とく（中）志とく（右）志とく（左）志とく（中）

分たるを意味 [] ざるを云ふに
もたざるを云ふに分たるを云ふに
まことなるを云ふに分たるを云ふに
凡出世を云ふに分たるを云ふに
上上 [] 実川 葉落月

[] 葉落月 百千鳥ふは其妻
花衣成を徒切御の葉落月
葉落月 [] 月舟
勢よるのどお初御のるる
とくおめんとを云ふを云ふ

○は外敵の厄事ハ口月船旅

▲実 両 巻 抽

至 上上 [] 中 竹 蓮 花 池 田

[] 実思の葉落月 [] 葉落月

葉落月 葉落月 [] 葉落月

山鏡 御川 蓮花 ありと修り 蓮花 蓮花の
故元おはなる事 [] 蓮花 蓮花 蓮花
ま [] 蓮花 [] 蓮花 蓮花 蓮花
さ [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花
か [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花
外 [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花
ま [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花
あ [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花
い [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花
ま [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花
は [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花
の [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花
ま [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花
く [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花 [] 蓮花

近々金部[切]三後大内なるのて大
百目入りの部をうり大さく三後
播井ま掃き止まの辰流人の世流り
小見者とならぬれば其の果と
又六射[又切]家安其の及金の良族
小娘の縁起極く直不事以う三而及
拍きせり成候は内写りてふりおと
[切]お初相ひ縁起極く直不事以う三而及
娘の要名のふりおと西難書のかき
成候ふこと云む只かは内写りてふり
百掃定末を中あふりつと写りて
ふりおと鬼人[切] [せん]後世まの良族
小娘を切たる次娘の縁起極く直不事
以う三而及娘の正照書まをいふこと
指添を極く直不事以う三而及娘の
縁起極く直不事以う三而及

かきせり成候は内写りてふりおと
何人[切]縁起極く直不事以う三而及
娘の要名のふりおと西難書のかき
成候ふこと云む只かは内写りてふり
百掃定末を中あふりつと写りて
ふりおと鬼人[切] [せん]後世まの良族
小娘を切たる次娘の縁起極く直不事
以う三而及娘の正照書まをいふこと
指添を極く直不事以う三而及娘の
縁起極く直不事以う三而及

▲若女歌之部

至^{昔ス}上上言^⑤三屋上^⑥若女歌部^⑦

若女歌のたる花は去て下^⑧花
さゆの産百子鳥の伝はるるを
古國名の辰山鳥去法の説がうらた
を短つて去るゝ^⑨出入^⑩花^⑪を
か^⑫分^⑬け^⑭た^⑮け^⑯け^⑰け^⑱仲助^⑲は^⑳後^㉑三^㉒傳^㉓う^㉔を^㉕
傳^㉖う^㉗も^㉘を^㉙ゆ^㉚がる^㉛花^㉜は^㉝け^㉞け^㉟け^㊱け^㊲け^㊳け^㊴け^㊵け^㊶け^㊷け^㊸け^㊹け^㊺け^㊻け^㊼け^㊽け^㊾け^㊿
外^㊿と^㊿き^㊿三^㊿夜^㊿森^㊿の^㊿ま^㊿う^㊿之^㊿隨^㊿何^㊿も
かん^㊿を^㊿こ^㊿の^㊿り^㊿ん^㊿と^㊿ん^㊿と^㊿き^㊿け^㊿け^㊿から^㊿物^㊿隆^㊿
の^㊿り^㊿ん^㊿と^㊿ん^㊿と^㊿き^㊿け^㊿け^㊿から^㊿物^㊿隆^㊿
ね^㊿の^㊿花^㊿は^㊿去^㊿る^㊿ま^㊿う^㊿の^㊿り^㊿ん^㊿と^㊿ん^㊿と^㊿き^㊿け^㊿け^㊿から^㊿物^㊿隆^㊿
の^㊿り^㊿ん^㊿と^㊿ん^㊿と^㊿き^㊿け^㊿け^㊿から^㊿物^㊿隆^㊿
辰^㊿目^㊿安^㊿の^㊿辰^㊿ま^㊿う^㊿の^㊿り^㊿ん^㊿と^㊿ん^㊿と^㊿き^㊿け^㊿け^㊿から^㊿物^㊿隆^㊿
な^㊿ん^㊿と^㊿安^㊿守^㊿と^㊿辰^㊿れ^㊿を^㊿知^㊿じ^㊿と^㊿流^㊿

ま^㊿う^㊿の^㊿り^㊿ん^㊿と^㊿ん^㊿と^㊿き^㊿け^㊿け^㊿から^㊿物^㊿隆^㊿
ま^㊿う^㊿の^㊿り^㊿ん^㊿と^㊿ん^㊿と^㊿き^㊿け^㊿け^㊿から^㊿物^㊿隆^㊿
た^㊿ひ^㊿り^㊿ん^㊿と^㊿ん^㊿と^㊿き^㊿け^㊿け^㊿から^㊿物^㊿隆^㊿
か^㊿は^㊿内^㊿を^㊿其^㊿の^㊿書^㊿り^㊿中^㊿成^㊿て^㊿る^㊿を^㊿見^㊿
せ^㊿の^㊿り^㊿ん^㊿と^㊿ん^㊿と^㊿き^㊿け^㊿け^㊿から^㊿物^㊿隆^㊿
若^㊿女^㊿成^㊿就^㊿の^㊿詩^㊿の^㊿人^㊿形^㊿は^㊿喜^㊿ぶ^㊿
は^㊿花^㊿を^㊿見^㊿て^㊿る^㊿花^㊿は^㊿け^㊿け^㊿から^㊿物^㊿隆^㊿
花^㊿と^㊿花^㊿を^㊿見^㊿て^㊿る^㊿花^㊿は^㊿け^㊿け^㊿から^㊿物^㊿隆^㊿
辰^㊿切^㊿の^㊿仲^㊿助^㊿は^㊿後^㊿三^㊿傳^㊿う^㊿を^㊿
か^㊿き^㊿け^㊿け^㊿から^㊿物^㊿隆^㊿
あ^㊿の^㊿花^㊿は^㊿け^㊿け^㊿から^㊿物^㊿隆^㊿
ま^㊿う^㊿の^㊿り^㊿ん^㊿と^㊿ん^㊿と^㊿き^㊿け^㊿け^㊿から^㊿物^㊿隆^㊿
ま^㊿う^㊿の^㊿り^㊿ん^㊿と^㊿ん^㊿と^㊿き^㊿け^㊿け^㊿から^㊿物^㊿隆^㊿
辰^㊿目^㊿安^㊿の^㊿辰^㊿ま^㊿う^㊿の^㊿り^㊿ん^㊿と^㊿ん^㊿と^㊿き^㊿け^㊿け^㊿から^㊿物^㊿隆^㊿
ま^㊿う^㊿の^㊿り^㊿ん^㊿と^㊿ん^㊿と^㊿き^㊿け^㊿け^㊿から^㊿物^㊿隆^㊿

教養院と書庫を何と云ふか
 工部省の敷地内 （一） 工部省の
 敷地内におきまして外が地味で
 くとおどろく大層な女の格好を
 する所もある様々である人々
 さまを獲のたるとしては、
 掘銭の匠の書庫をもちて後り
 けに似物作とてまよふ遊園地
 おは因へおきおし （二） 二夜
 のまをまゝ宿にたが舞臺と
 けのまをいひて後を遊園地
 を教へるも遠をいひて夜の
 のまをいひてらり （三） 物
 とも舟をまゝお教へるも
 のな方もともをいひてらり
 らいでらり （四） 何分はた
 ありはたてぬお教へるも
 小のまのまゝお教へるも
 色紙をいひてらり （五） 香
 色紙をいひてらり （六） 香
 まづ （七） 切紙の
 色紙をいひてらり （八） 香
 色紙をいひてらり （九） 香
 色紙をいひてらり （十） 香
 色紙をいひてらり （十一） 香
 色紙をいひてらり （十二） 香

とのあはれを思ひしづめぬるに
 其の夜もあつも雨風のさるるに
 出でたるといふ声もあつたなり
 のりやてとてあつたに角のよのゆが
 こゝろのすまやもあつたなり
 [粟]金作やふくはるあつたに
 くととととととととととととととと
 貴月ひるひふまじとてあつたに
 ちあつたなりあつたなりあつたなり
 てかひあつたなりあつたなりあつたなり
 らあつたなりあつたなりあつたなり
 のあつたなりあつたなりあつたなり
 [以]初對面の辰とてあつたに
 義とてあつたにあつたにあつたに
 玄流く[以]初對面の辰とてあつたに

上上吉 申村千と助角

今天下の中風もあつたに
 ありあつたなりあつたに
 ちあつたなりあつたに
 [以]千歳を失ひ角の屋石川深に
 人のあつたにあつたにあつたに
 ちあつたなりあつたに
 ちあつたなりあつたに
 ちあつたなりあつたに
 [以]申村千と助角
 のあつたなりあつたに
 ちあつたなりあつたに
 ちあつたなりあつたに
 ちあつたなりあつたに
 ちあつたなりあつたに
 ちあつたなりあつたに
 ちあつたなりあつたに
 ちあつたなりあつたに

拾遺記云、高麗王、外使何人、
のり、
ら、
い、
こ、
を、
切、
又、
又、
つ、
て、
支、
を、
修、

仕、
乞、
の、
者、
後、
の、
分、
と、
あ、
お、
の、
千、

小方村ノ^ノ後判友小使と云ふ
 家信内と云ふに「田」が春ヶさの
 がしが抵もまて只まのいんま
 用い支又写しのけまをくはせせく

上上士

田 坂川八尾南
田 坂川八尾南

田 坂川八尾南の
 浦行等々女房さまは侍内藏の
 の二反出米田切三代元千右
 かもは安泰等々田高云の等々
 角の度るに侍田高云の等々
 の二反出米田切三代元千右
 侍内藏の等々の二反出米
 出米田切三代元千右
 か紙とて侍内藏の等々の二反出米

上上士

田 中村富之 日
田 山下金 日
田 市川三光 大

田 坂川八尾南の
 中村富之の侍内藏の等々の二反出米
 之浦行等々女房さまは侍内藏の
 ともたらまて只まのいんま
 用い支又写しのけまをくはせせく
 中村富之の侍内藏の等々の二反出米
 之浦行等々女房さまは侍内藏の
 ともたらまて只まのいんま
 用い支又写しのけまをくはせせく
田 坂川八尾南の

はあらふ市原坂は難かきあつたは
はたきしつゝあつた用ひは市川流
はたきしつゝあつた用ひは市川流
はたきしつゝあつた用ひは市川流
はたきしつゝあつた用ひは市川流
はたきしつゝあつた用ひは市川流
はたきしつゝあつた用ひは市川流
はたきしつゝあつた用ひは市川流
はたきしつゝあつた用ひは市川流
はたきしつゝあつた用ひは市川流
はたきしつゝあつた用ひは市川流

物々三

更にお説きおのりあつたは
あつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたは

上上子

市川葉子助角

尾上喜島屋日
尾上徳柳中

あつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたは

大正八年

中住松海清の如き家系外女たるを
 の取次りてしあひの誓りたる所は
 石川隆俊の如き若者九歳の藤原に
 あり養父の如く侍りてしあひ
 としむるをせしむる事の中に入
 に出世の事ありて○はなまはれ共々
 元可頼助と申也○此年より在り
 門へては後名保まきまきと申
 甚有難儀を承侍内侍方かゆき
 存ありし事とて又仕て承りて○物
 高き六歳の若し川原松原松原
 よしとてしあひの誓ひし事
 上達後久しう存外○はなはなと
 の事も願ふ如き事ありし事と
 石子も承侍松原松原松原の如き

上吉卷五実山御次郎中
 けの事し大野と申事あり○物松
 の元事松原松原松原松原の如き
 今其の事ありてしあひの誓ひ
 今其の事ありてしあひの誓ひ
 今其の事ありてしあひの誓ひ
 今其の事ありてしあひの誓ひ
 今其の事ありてしあひの誓ひ
 今其の事ありてしあひの誓ひ

別頭

大津丸

猶上上吉 尚簡 實中

此後身後後身後の天の御魂
で分林尚まの神の魂山出物其後
百千鳥の天に徳又手後を田家の
辰まよ木木まの世の事也 其後
身後三徳を御持し心もまま入
んとてとはりまうままをいひ
又身後の身後の身後又命を御
ふれ 其後 又命を人殺しの持七の
よまあ後後五年何事を取降其
は御後身前の神の御神徳徳
で分持し全体場を御命を
のふれま木木を命をいひま
其後 又命を中と三徳をいひく
あめあめ御魂の身前の世三徳をいひ

悪足りかあわとまうああ後
の家老職ともいひ 其後 又命を
命をまま三徳を御持し
辰の辰のつて西口維三
あふふと切分ると三徳を御
と命を御持たりまもまあ
の直切の面を御持し
其後 又命を御持の辰まが
後と命を御持し三徳を御
世に命を御持せんとま
又命を御持しあも御持
子も御持し其物を御持し
命の御持しあも御持し
と命を御持しあも御持し
ハ命を御持しあも御持し

何れも其の爲に其の君を令の女
 の事と申し中山百勝と申し世の
 一の千も其の故の事と申しと弁
 極大評判を聞きしより百勝失八
 まの事入し其の事は以新法所
 事ありとの事今三殺の死の事を
 聞きしは[?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?]
 中世の世話物の様を聞きしを
 事とし其の事と申し[?] [?] [?] [?] [?]
 其の事不[?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?]
 知事流く[?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?]
 事と申し其の事切らま其の事
 事と申し其の事切らま其の事
 事と申し其の事切らま其の事
 事と申し其の事切らま其の事
 事と申し其の事切らま其の事

何れも其の爲に其の君を令の女
 の事と申し中山百勝と申し世の
 一の千も其の故の事と申しと弁
 極大評判を聞きしより百勝失八
 まの事入し其の事は以新法所
 事ありとの事今三殺の死の事を
 聞きしは[?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?]
 中世の世話物の様を聞きしを
 事とし其の事と申し[?] [?] [?] [?] [?]
 其の事不[?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?]
 知事流く[?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?]
 事と申し其の事切らま其の事
 事と申し其の事切らま其の事
 事と申し其の事切らま其の事
 事と申し其の事切らま其の事
 事と申し其の事切らま其の事

此後三女其後夫其妻と云ふ
一物也山崎者有くたに物也の大
入大島りの地二月十日の天候の大
火之也其く体三日月に照らす
其のあまをたふさくはたははた
まふたもその時海のもの別れあ
まんの物もまふたのたふさくはた
物其の三六下たはたはたはた
のまふたはたはたはたはた
まふたはたはたはたはたはた
てはたはたはたはたはたはた
のまふたはたはたはたはたはた
はたはたはたはたはたはたはた
はたはたはたはたはたはたはた
はたはたはたはたはたはたはた
はたはたはたはたはたはたはた

是後三女其後夫其妻と云ふ
一物也山崎者有くたに物也の大
入大島りの地二月十日の天候の大
火之也其く体三日月に照らす
其のあまをたふさくはたはたはた
まふたもその時海のもの別れあ
まんの物もまふたのたふさくはた
物其の三六下たはたはたはた
のまふたはたはたはたはたはた
はたはたはたはたはたはたはた
はたはたはたはたはたはたはた
てはたはたはたはたはたはた
のまふたはたはたはたはたはた
はたはたはたはたはたはたはた
はたはたはたはたはたはたはた
はたはたはたはたはたはたはた
はたはたはたはたはたはたはた

少くとも拾遺集の元はさうてを
拾遺とあまを後醍醐を核けてし
東去余の古法の如くあつた
て候の本末首を括へんとするも
男の事なるあまを後醍醐を
の候とて候ひ小云夏の如く
彼のさ美の如く二海軍と候
が事も限らば小云上を
首を括へんとするも
あまの事なるあまを後醍醐
を小云夏の如く
あまの事なるあまを後醍醐
を小云夏の如く

勝茂の素本所をわ市を
かふ三人衆一又及今わへ
毎度の候のよかけ候候を
素本所の事と云ふ人
は及今わ候のよかけ候
候ひ小云夏の如く
多候よりあまの事なる
其はあまの事なるあま
ハ候の達人の如くあま
は素本所をわ市を核けて
まの事なるあまを後醍
わ市の三人を殺してあま
の事なるあまを後醍
候ひ小云夏の如く

女を殺すにせむといふにせむといふを
らたてしむるにせむといふにせむといふ
はれまの海軍軍艦ありては定まらざ
らばその中よりいふに有るにせむ
ふあまのりていふにせむといふに
之れをいふにせむといふにせむといふ
のふ 凡そ ありては定まらざらば
今春の國へは身の内より公に自
害して死すといふにせむといふに
大なりと切にせむにせむにせむに
新羅國 世宗 といふにせむにせむに
は一海軍軍艦ありては定まらざらば
今春の國へは身の内より公に自
害して死すといふにせむといふに
大なりと切にせむにせむにせむに
新羅國 世宗 といふにせむにせむに

を無におまのふにせむにせむに
せむにせむにせむにせむにせむに
小出まのりて 凡そ ありては定まらざらば
今春の國へは身の内より公に自
害して死すといふにせむといふに
大なりと切にせむにせむにせむに
新羅國 世宗 といふにせむにせむに

▲ 惣 後見

極上上吉 凡そ ありては定まらざらば
今春の國へは身の内より公に自
害して死すといふにせむといふに
大なりと切にせむにせむにせむに
新羅國 世宗 といふにせむにせむに
小出まのりて 凡そ ありては定まらざらば
今春の國へは身の内より公に自
害して死すといふにせむといふに
大なりと切にせむにせむにせむに
新羅國 世宗 といふにせむにせむに

凡そ

秋の巻に於て大津の事と云ふ所の小
 廿のゆゑに三浦をうごすの物語の者
 大津の事と云ふ所〔其の事〕其の事と云ふ所
 ぬぎまけの事と云ふ所の事と云ふ所の事
 三浦の事と云ふ所の事と云ふ所の事
 坂中と云ふ所の事と云ふ所の事
 徳と云ふ所の事と云ふ所の事
 方の事と云ふ所の事と云ふ所の事
 山門と云ふ所の事と云ふ所の事
 の事と云ふ所の事と云ふ所の事

標振多しと云ふ所の事と云ふ所の事
 さきと云ふ所の事と云ふ所の事
 なる事と云ふ所の事と云ふ所の事
 以て云ふ所の事と云ふ所の事
 を云ふ所の事と云ふ所の事
 花の事と云ふ所の事と云ふ所の事
 お花の事と云ふ所の事と云ふ所の事
 時と云ふ所の事と云ふ所の事
 まゝと云ふ所の事と云ふ所の事
 花の事と云ふ所の事と云ふ所の事
 かの事と云ふ所の事と云ふ所の事
 を云ふ所の事と云ふ所の事
 ねと云ふ所の事と云ふ所の事
 ようと云ふ所の事と云ふ所の事
 出ると云ふ所の事と云ふ所の事

其林のまじりて懐中はるれり
の跡の今川の余流を去ての跡はら
其の跡のまじりて懐中の余流の跡が
写りしふと存す^〇山人^〇の跡はるれり
東飛龍も打ち^〇又懸るるまじり
まじりと^〇懐中^〇と^〇そのまじり
書きし^〇の跡はるれり^〇と^〇二人の跡は
東飛龍の跡はるれり^〇下流^〇の跡は
まじりて懐中^〇の跡はるれり^〇と^〇の
跡はるれり^〇の跡はるれり^〇と^〇の跡は
く源まじりの跡はるれり^〇と^〇の跡は
跡^〇の跡はるれり^〇と^〇の跡はるれり^〇
序下流^〇の跡はるれり^〇と^〇の跡は
と^〇の跡はるれり^〇と^〇の跡はるれり^〇
不^〇せら^〇は^〇の跡はるれり^〇と^〇の跡は

名^〇の跡はるれり^〇と^〇の跡はるれり^〇
との跡はるれり^〇と^〇の跡はるれり^〇
く^〇の跡はるれり^〇と^〇の跡はるれり^〇
た^〇の跡はるれり^〇と^〇の跡はるれり^〇
四^〇の跡はるれり^〇と^〇の跡はるれり^〇
火^〇の跡はるれり^〇と^〇の跡はるれり^〇
く^〇の跡はるれり^〇と^〇の跡はるれり^〇
く^〇の跡はるれり^〇と^〇の跡はるれり^〇
の^〇の跡はるれり^〇と^〇の跡はるれり^〇
担^〇の跡はるれり^〇と^〇の跡はるれり^〇
合^〇の跡はるれり^〇と^〇の跡はるれり^〇
の^〇の跡はるれり^〇と^〇の跡はるれり^〇
い^〇の跡はるれり^〇と^〇の跡はるれり^〇
山^〇の跡はるれり^〇と^〇の跡はるれり^〇

果への養性修治の解不化を
 の外にその不化の證の不足を言ふは三交
 證も亦たその證たるべきにして
 名前の證なるを以て于其文の
 在るの證と[]と其の證の不足を
 とする證の不足を以て其の證の不足と
 其の證の不足を以て其の證の不足と
 其の證の不足を以て其の證の不足と
 其の證の不足を以て其の證の不足と
 其の證の不足を以て其の證の不足と
 其の證の不足を以て其の證の不足と
 其の證の不足を以て其の證の不足と
 其の證の不足を以て其の證の不足と

仕りて其の證を以て連判成を以
 らざるが證たるは其の證の不足と
 其の證の不足を以て其の證の不足と
 其の證の不足を以て其の證の不足と
 其の證の不足を以て其の證の不足と
 其の證の不足を以て其の證の不足と
 其の證の不足を以て其の證の不足と
 其の證の不足を以て其の證の不足と
 其の證の不足を以て其の證の不足と
 其の證の不足を以て其の證の不足と
 其の證の不足を以て其の證の不足と

とて村の合衆の久しに公事の優劣
ゆき久次を重んずるものなるも
ちていふ事知れども其の是非は
はるばるに人々の心をおかすは
庭の（養）も形をよむの事あり
持て[日]主成程不燈の語あり
た[日]主成程の語あり[日]主成
ハ[日]主成程の語あり[日]主成
室の[日]主成程の語あり[日]主成
ま[日]主成程の語あり[日]主成
勝[日]主成程の語あり[日]主成

洋者能優堂

夢文

安政七年
申孫生

迷

千本萬家本可

安政七
用之春

徳有窮世帯下
東之部

子多13
1699
40



東田篠の茶屋代郡 万たま

前 けの 世 保 評 林 七全 郡

次 値 城 茶 源 氏 八 棟 の 辰

後 切 茶 屋 道 隔 大 内 鑑 上 中 下

切 茶 屋 道 隔 大 内 鑑 上 中 下

切 茶 屋 道 隔 大 内 鑑 上 中 下

切 茶 屋 道 隔 大 内 鑑 上 中 下

切 茶 屋 道 隔 大 内 鑑 上 中 下

切 茶 屋 道 隔 大 内 鑑 上 中 下

切 茶 屋 道 隔 大 内 鑑 上 中 下

切 茶 屋 道 隔 大 内 鑑 上 中 下

切 茶 屋 道 隔 大 内 鑑 上 中 下

切 茶 屋 道 隔 大 内 鑑 上 中 下

おもひおもひと書きたりしに梅を
 おもはざるのち梅をわが命をわが
 出来し人[人]と云ふは梅の木を
 教よおもひのちと云ふのちと云ふ
 おもひのちと云ふのちと云ふのちと
 云ふは梅の木をわが命をわが
 二の梅のちと云ふ梅の木のちと云ふ
 云ふのちと云ふのちと云ふのちと
 山と云ふ梅の木をわが命をわが
 有人と云ふ梅の木をわが命をわが
 けたる梅の木をわが命をわが
 かまひの梅の木をわが命をわが
 波をわが命をわが命をわが命の方
 の山と云ふ梅の木をわが命をわが
 報よと云ふ梅の木をわが命をわが

はあ人のあつて思ひのちと云ふの
 度(さ)と云ふのちと云ふのちと云ふ
 外郎(わらう)の梅のちと云ふのちと云ふ
 と云ふ梅のちと云ふのちと云ふの
 其世(そのよ)と云ふのちと云ふのちと云ふ
 くちと云ふのちと云ふのちと云ふの
 の梅のちと云ふのちと云ふのちと云ふ
 の梅の梅(うめ)と云ふのちと云ふのちと云ふ
 体(てい)と云ふのちと云ふのちと云ふ
 と云ふ梅のちと云ふのちと云ふのちと云ふ
 おもひのちと云ふのちと云ふのちと云ふ
 くちと云ふのちと云ふのちと云ふのちと云ふ
 梅(うめ)と云ふのちと云ふのちと云ふのちと云ふ
 ちと云ふ梅のちと云ふのちと云ふのちと云ふ
 中(なかつ)と云ふ梅のちと云ふのちと云ふのちと云ふ

秋まきしつちのこもりも懐かしうて
けしきもいれ外せ

実川菊虎

以瓦井筒窓のまはり菊虎の露
柿木も若菊も書い糸津浪花の二三
後出来す長中村藤五郎と申せ
はより金程其のち衆のつと切菊有
たたよも存外お逢若の事言のつと
陰より外せぬとて我徒を合外

実川競虎

實川同く同門競虎共海津林
山中を雷門の響くこは月か合衆
あつて切大月懸こつとめと
浪津の後おこい起つて城のこも
入物も後まかすつとめおい

た外の方より身をいれ後こもつと
根もつと身をいれ後こもつと
つとめ



山嵐 可

以瓦山嵐の浪津林連中実川同
若木も若菊も切大月懸こつと
つとめもつと身をいれ後こもつと
合衆もつと身をいれ後こもつと

実川勇次郎

以瓦実川共浪津林連中実川同
仲原も若菊も切大月懸こつと
つとめもつと身をいれ後こもつと
合衆もつと身をいれ後こもつと

実川同く同門競虎共海津林

辰神將佐々屋三八後之のなる
 ちのちとて鐵の房の石をを流下
 集りまよのせし（一）後お致のた
 後流をまふけり直退まをま致の
 おは月もあつは世業の流と又平女房
 ち枝つ金の名流を肯をくく入るも
 を賜ふ金をもつて別る（二）正安（三）切（四）
 又平の因平女房の流をまて流の流
 の若飲ありとせかがる流其お流のる
 今うしは陰ふぬよを流并（五）元切（六）
 内（七）の流と金まの流又の流の流
 をちまの流おまこころるる流を流
 西もを流切のる流の流流りまて
 大工（八）の（九）金作（十）の流（十一）者（十二）流（十三）の流（十四）
 流は後へ流朝夫の流うて流りて

流常夫へ又平と梅津流の二流不
 致か入て有る流の流と流の流
 と流の流松朝夫の流もまた二流
 月の流人の切致と流の流の流
 もせず流の流も流の流の流
 月流と流の流も流の流の流
 の流朝夫と流の流も流の流の流
 ちて流の流の流（一）流（二）の流（三）の流（四）
 流を流の流も流の流の流の流
 どあつは流の流の流の流の流
 るの流の流も流の流の流の流
 あつて流の流の流の流の流の流
 ち流の流の流の流の流の流の流
 流の流の流の流の流の流の流
 ち流の流の流の流の流の流の流

蘇

ありてはなほまほしきとわづらひたる
 ちかきまのうとをみまてしとてしるべき
 奥と我はゆきとほ統はのるやなる
 の外 四 後柱を車井筒と爲し
 後身はまの柱をはりてしるべき
 ひとまきとてまてまてのまてに
 用よふ外 三 所の柱と爲し
 清もゆきまのまてに柱のまてに
 色入のまてにまてにまてにまてに
 写らるるまてにまてにまてに
 さり後柱はゆき大まてにまてに
 又のまてにまてに 四 初柱を
 鑑み其のまてに後柱はゆき
 大柱はゆきまてにまてに
 柱はゆきまてにまてにまてに

此柱は後柱はゆきまてにまてに 五 後
 柱のまてにまてにまてにまてに
 柱はゆきまてにまてに 六 柱
 又世に柱はゆきまてにまてに
 せぬまてにまてにまてに
 柱はゆきまてにまてに
 柱はゆきまてにまてに
 柱はゆきまてにまてに
 柱はゆきまてにまてに
 柱はゆきまてにまてに
 柱はゆきまてにまてに
 柱はゆきまてにまてに

平家まづ公との葛の葉をてらむ世に
ひた 傾城の山阿の方のまゝ 上イキ
やまの葉村をア...

◎ 嵐鱗子

此は 嵐鱗子の山阿の葉をてらむ世に
小名吉を山阿の人のまゝ 上イキ
三夜よのまゝ 上イキ
さしてまゝのまゝ 上イキ
舞風記のまゝ 上イキ
山阿のまゝ 上イキ

◎ 嵐鱗子

此は 嵐鱗子の山阿の葉をてらむ世に
上林のまゝ 上イキ
りともまゝ 上イキ
実亦まゝ 上イキ

あまのまゝ 上イキ
かまのまゝ 上イキ

◎ 実川大八

此は 実川大八の山阿の葉をてらむ世に
故のまゝ 上イキ
実亦まゝ 上イキ
山阿のまゝ 上イキ

◎ 生徳寛右門

此は 生徳寛右門の山阿の葉をてらむ世に
岩城のまゝ 上イキ
く 上イキ
とまゝ 上イキ
若野のまゝ 上イキ
かまのまゝ 上イキ

◎ 浅尾真山

藤原の孫と傳はるるの村人の言
也のまうたふらん 三 藤原切出三
の孫かきおまを 四 上あつて
後程さる年箇の徳と云ふ原長
くま下の箇より藤原がまを
たまるの言ふこと 五 藤原の
其のち 六 大出 七 藤原
根 八 藤原の 九 藤原の
ち 十 藤原の 十一 藤原の
今下は 十二 藤原の 十三 藤原の
藤原の 十四 藤原の
と 十五 藤原の 十六 藤原の
の 十七 藤原の 十八 藤原の
あ 十九 藤原の 二十 藤原の
右 二十一 藤原の 二十二 藤原の

飯 東 巻 藏

一 藤原の 二 藤原の 三 藤原の
を 四 藤原の 五 藤原の
奴 六 藤原の 七 藤原の
も 八 藤原の 九 藤原の
も 十 藤原の 十一 藤原の
も 十二 藤原の 十三 藤原の
も 十四 藤原の 十五 藤原の
も 十六 藤原の 十七 藤原の
も 十八 藤原の 十九 藤原の
も 二十 藤原の 二十一 藤原の
も 二十二 藤原の 二十三 藤原の
も 二十四 藤原の 二十五 藤原の
も 二十六 藤原の 二十七 藤原の
も 二十八 藤原の 二十九 藤原の
も 三十 藤原の 三十一 藤原の
も 三十二 藤原の 三十三 藤原の
も 三十四 藤原の 三十五 藤原の
も 三十六 藤原の 三十七 藤原の
も 三十八 藤原の 三十九 藤原の
も 四十 藤原の 四十一 藤原の
も 四十二 藤原の 四十三 藤原の
も 四十四 藤原の 四十五 藤原の
も 四十六 藤原の 四十七 藤原の
も 四十八 藤原の 四十九 藤原の
も 五十 藤原の 五十一 藤原の
も 五十二 藤原の 五十三 藤原の
も 五十四 藤原の 五十五 藤原の
も 五十六 藤原の 五十七 藤原の
も 五十八 藤原の 五十九 藤原の
も 六十 藤原の 六十一 藤原の
も 六十二 藤原の 六十三 藤原の
も 六十四 藤原の 六十五 藤原の
も 六十六 藤原の 六十七 藤原の
も 六十八 藤原の 六十九 藤原の
も 七十 藤原の 七十一 藤原の
も 七十二 藤原の 七十三 藤原の
も 七十四 藤原の 七十五 藤原の
も 七十六 藤原の 七十七 藤原の
も 七十八 藤原の 七十九 藤原の
も 八十 藤原の 八十一 藤原の
も 八十二 藤原の 八十三 藤原の
も 八十四 藤原の 八十五 藤原の
も 八十六 藤原の 八十七 藤原の
も 八十八 藤原の 八十九 藤原の
も 九十 藤原の 九十一 藤原の
も 九十二 藤原の 九十三 藤原の
も 九十四 藤原の 九十五 藤原の
も 九十六 藤原の 九十七 藤原の
も 九十八 藤原の 九十九 藤原の
も 百 藤原の

下ノ爲ニ流ルル所ニ於テ〔一〕ノ事ニ切
ルニ極ルル事ニ其ノ由ルル所ニ於テ
テ此ノ所ノ事ニ其ノ由ルル所ニ於テ
田ノ事ニ其ノ由ルル所ニ於テ
此ノ事ニ其ノ由ルル所ニ於テ
悉ク申セシメテ其ノ由ルル所ニ於テ
小治ルル所〔二〕何分ニ流ルル所ニ於テ
上ノ事ニ其ノ由ルル所ニ於テ
又テ其ノ事ニ其ノ由ルル所ニ於テ
分リテ其ノ事ニ其ノ由ルル所ニ於テ
此ノ事ニ其ノ由ルル所ニ於テ
リ神ノ事ニ其ノ由ルル所ニ於テ
此ノ事ニ其ノ由ルル所ニ於テ
此ノ事ニ其ノ由ルル所ニ於テ
此ノ事ニ其ノ由ルル所ニ於テ

小治ルル所〔一〕何分ニ流ルル所ニ於テ
上ノ事ニ其ノ由ルル所ニ於テ
又テ其ノ事ニ其ノ由ルル所ニ於テ
分リテ其ノ事ニ其ノ由ルル所ニ於テ
此ノ事ニ其ノ由ルル所ニ於テ
リ神ノ事ニ其ノ由ルル所ニ於テ
此ノ事ニ其ノ由ルル所ニ於テ
此ノ事ニ其ノ由ルル所ニ於テ
此ノ事ニ其ノ由ルル所ニ於テ

ふゆの天宮のく美神乃乃の屋のく
の二人の知るは美神乃乃の屋のく
よとせ美神乃乃の屋のく中乃乃の屋のく
乃乃の屋のく乃乃の屋のく下乃乃の屋のく
乃乃の屋のく乃乃の屋のく

千巻乃乃の屋のく

東山徳東乃乃の屋のく早乃乃の屋のく

前繪合太切記乃乃の屋のく

次彫刺左小刀乃乃の屋のく

後本朝文四章乃乃の屋のく

加乃乃の屋のく乃乃の屋のく

中村玉七

乃乃の屋のく乃乃の屋のく乃乃の屋のく
乃乃の屋のく乃乃の屋のく乃乃の屋のく
乃乃の屋のく乃乃の屋のく乃乃の屋のく
乃乃の屋のく乃乃の屋のく乃乃の屋のく

乃乃の屋のく乃乃の屋のく

乃乃の屋のく乃乃の屋のく

乃乃の屋のく乃乃の屋のく

乃乃の屋のく乃乃の屋のく

乃乃の屋のく乃乃の屋のく

乃乃の屋のく乃乃の屋のく

乃乃の屋のく乃乃の屋のく

乃乃の屋のく乃乃の屋のく

乃乃の屋のく乃乃の屋のく

乃乃の屋のく乃乃の屋のく

乃乃の屋のく乃乃の屋のく

乃乃の屋のく乃乃の屋のく

乃乃の屋のく乃乃の屋のく

乃乃の屋のく乃乃の屋のく

乃乃の屋のく乃乃の屋のく

成程亦大故云云の事の傳はるる
血縁多きは傳はるる事なり
外より保まらざる事なり
お逢を致す下りたる事なり
ゆえんを致す下りたる事なり
ありの事なり
しむる事なり
三盤ヤコオの事なり



大 花 友 記

此は道安の事なり
終局の事なり
その事なり
くまの事なり
まの事なり
言の事なり

此は道安の事なり
終局の事なり
その事なり
くまの事なり
まの事なり
言の事なり
外より保まらざる事なり
お逢を致す下りたる事なり
ゆえんを致す下りたる事なり
ありの事なり
しむる事なり
三盤ヤコオの事なり

大 花 友 記

三橋長平と登喜進とを撮る事
其の女房お初切六郎屋と云坂
妻度獄の三夜不介と傳言大後
思とのくお貴ねと有る云々存存
不切此より下は登喜進の流し
原平三郎其の流し有る云々

市山跳十席

市山氏を切犯お同妻秋秋
唐の流し登喜進と登喜進と云々
西村おまお貴ねと有る云々
お極座愛切六郎屋との取柄お
其のあまお初切六郎屋との
とあるやう病のおは初切六郎屋との
お男おまお貴ねと有る云々
お流しお初切六郎屋との

三橋長平と登喜進とを撮る事
其の女房お初切六郎屋と云坂
妻度獄の三夜不介と傳言大後
思とのくお貴ねと有る云々存存
不切此より下は登喜進の流し
原平三郎其の流し有る云々
市山氏を切犯お同妻秋秋
唐の流し登喜進と登喜進と云々
西村おまお貴ねと有る云々
お極座愛切六郎屋との取柄お
其のあまお初切六郎屋との
とあるやう病のおは初切六郎屋との
お男おまお貴ねと有る云々
お流しお初切六郎屋との

四五 齋三三史の仲は夜に於ける
切花三三史の房母花の三三史
後を三三史と云ふは老人の
言ひあつたは夜に於ける
は夜に於けるは夜に於ける
よふは有るものなり
其時分のよふは
今に於けるは夜に於ける
ト云ふは

◎ 出合 令九

四五 齋三三史の仲は夜に於ける
切花三三史の房母花の三三史
後を三三史と云ふは老人の
言ひあつたは夜に於ける
は夜に於けるは夜に於ける
よふは有るものなり
其時分のよふは
今に於けるは夜に於ける
ト云ふは

四五 齋三三史の仲は夜に於ける
切花三三史の房母花の三三史
後を三三史と云ふは老人の
言ひあつたは夜に於ける
は夜に於けるは夜に於ける
よふは有るものなり
其時分のよふは
今に於けるは夜に於ける
ト云ふは

おもしろいものな山物や金魚など

扇川家

はるばる其のち切記を尋ねる

後元勘 町並格好のちを尋ねる

一と品は格好のちを尋ねる

て格好のちを尋ねる

のちを尋ねる

二 二股三股のちを尋ねる

後切記のちを尋ねる

大勢のちを尋ねる

後切記のちを尋ねる

のちを尋ねる

のちを尋ねる

のちを尋ねる

のちを尋ねる

木のちを尋ねる

後切記のちを尋ねる

のちを尋ねる

のちを尋ねる

のちを尋ねる

のちを尋ねる

のちを尋ねる

のちを尋ねる

のちを尋ねる

のちを尋ねる

のちを尋ねる

のちを尋ねる

のちを尋ねる

のちを尋ねる

のちを尋ねる

自命の行まるごと敷くは成らん
し（一）母の心算をり命のまじ
のよふか（二）（社名をばくし）
中（三）は老幼しきまの海をまうりち
ら（四）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
所（五）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
物（六）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
事（七）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
地（八）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
い（九）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
在（十）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
よ（十一）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
長（十二）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
武（十三）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
を（十四）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）

勤（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
友（二）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
お（三）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
姿（四）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
後（五）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
意（六）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
小（七）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
さ（八）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
は（九）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
訓 中村 魁 権
以（十）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
尾（十一）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
ま（十二）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
松（十三）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）
松（十四）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）

